

前人未到の挑戦を成し遂げた備前焼作家

森陶岳氏が名誉市民に

全 長85メートルの大窯焼成を成功させるなど、前人未到の挑戦を成し遂げた森陶岳（本名・才蔵）氏が、瀬戸内市名誉市民条例に基づき、市議会の同意を得て名誉市民に推薦されました。

名誉市民条例は、社会文化の興隆に功績があった人に対して、その功績をたたえることを目的に制定されたものです。瀬戸内市の名誉市民としては、写真家の故縁川洋一氏に続いて13人目となります。



備前焼作家 森陶岳氏（牛窓町長浜・79歳）

森 陶岳氏は、備前焼作家として活躍し、30代前半で日本陶磁協会賞を受賞するなど、備前焼界を代表する作家の一人となりました。

平成8年には、岡山県指定重要無形文化財保持者に認定され、現在に至るまで弟子や子息など、後進の指導にあたっています。

作 品は、皇居新御所をはじめ、伊勢神宮、京都上賀茂神社、下鴨神社などの神社・仏閣に収蔵され、「現代陶芸の造形性と新しい美の創造を実現した」と高く評価されています。

しかし、陶岳氏自身は「古備前が持つエネルギーにはかなわない」と感じ、古備前の美を追求するため、昭和46年から大窯計画に着手。以来、

全長46メートルの相生大窯、53メートルの寒風大窯、85メートルの寒風新大窯と、40年にわたって挑戦を続けてきました。

特 に、27年もの歳月をかけて築いた、全長85メートル、幅6メートル、高さ3メートルの寒風新大窯は、陶岳氏が追求してきた古備前の美に迫る取り組みの集大成となりました。

平成21年から26年まで新五石大甕の制作と窯詰め、平成27年1月に火入れが行われました。そして、107日間に及ぶ窯焚きを終えて、同年7月から窯出しが行われました。



空から見た全長85mの寒風新大窯

これらは、緻密な計算と実験の上に行われた、他の追随を許さない壮大な事業であり、その成果は驚くべきものであったとのこと。古備前に迫る迫力を持ったものだけでなく、これまでの備前焼にない焼け色や白い胡麻の

こ れらは、緻密な計算と実験の上に行われた、他の追随を許さない壮大な事業であり、その成果は驚くべきものであったとのこと。古備前に迫る迫力を持ったものだけでなく、これまでの備前焼にない焼け色や白い胡麻の

れらは、緻密な計算と実験の上に行われた、他の追随を許さない壮大な事業であり、その成果は驚くべきものであったとのこと。古備前に迫る迫力を持ったものだけでなく、これまでの備前焼にない焼け色や白い胡麻の

れらは、緻密な計算と実験の上に行われた、他の追随を許さない壮大な事業であり、その成果は驚くべきものであったとのこと。古備前に迫る迫力を持ったものだけでなく、これまでの備前焼にない焼け色や白い胡麻の

- ・日本陶磁協会賞
- ・山陽新聞社賞（文化功労）
- ・日本陶磁協会賞金賞
- ・文化庁長官表彰
- ・紫綬褒章
- ・福武文化賞
- ・三木記念賞（文化部門）
- ・岡山県文化賞

瀬戸内発見伝

巻之百二十三

オモシロ侍文化と日本刀展



江戸時代、為政者である侍は威張り散らす人ばかりではなかったようです。日本刀にまつわる川柳からどこか憎めない侍たちの悲哀あふれる生活をのぞいてみましょう。

してもらっている様子。しかも見られていたようです。お殿様はお殿様で、一年おきに江戸と国元を行ったり来たりします。これを参勤交代といいます。

この時には大名らしく、立派な行列を組むのですが、それだけの侍を連れて行き来するのはお金がかかります。そこで、所要所で臨時にアルバイトの侍を雇い、行列を立派に見せていました。

野雪隠 地蔵しばらく
刀番

国元から江戸へ単身赴任をする侍たち。基本は歩いて旅をします。街道には宿場町が整備され、合間に休憩できる茶屋がありました。その途中は当然、トイレは自然の中。長い御刀を差したままだとしゃがみにくいので、お地蔵さまをお願いして番を

魂で 腰骨いたむ
俄武士

俄武士はアルバイト侍は、魂に御刀を腰に差し慣れないため、腰骨が痛くなつて

いたようです。しかもそれがバレています。こうした大名行列を、横切ったり邪魔をしたりすると斬り捨てられても文句が言えなかった世の中で、例外もありました。

大名を 胴切りにする
子安婆々

子安婆々産婆さんのことで、今で言う助産師だけに、特別に行列を胴切りするように横切っても許されています。江戸では侍たちは基本的に単身赴任が多いため、料理や掃除、洗濯をすべてやっていました。

大小に 人の日頃は
あらはれて

大小の刀と脇指の二口のこと、二本差してよいのは侍だけ。その大小のくたびれ具合に、日頃の侍の生活感が見え隠れしていたようです。その大小の外装の造りの良し悪しで身分を推測することができました。

金鐺の 光る方へと
茶をはこび

上座の分かりにくい茶屋などで、侍たちへお茶を出すときの順番に悩んだ店員が、外装の鐺などが金や銀などで施されている身分の高い侍と推測して先にお茶を出している様子が見られます。そんな侍たちの憧れが備前長船の御刀。

なが船と よんで見たをし
かいたがり

万人が知る長船を、見たを

大小を 後ろに指して
潮干潟

侍たるゆえんの大小二本差して潮干狩りに来たお侍さん。でもやっぱり腰の横に差していたのでは、少し不便だったのでしよう。想像すると、こんなお侍さんも素敵ではないでしょうか。

備前長船刀剣博物館では、テーマ展「オモシロ侍文化と日本刀展」と題して、これらの川柳とともに関連する刀剣を11月6日（日）まで展示しています。